

歌

もりもと むねのり
森本宗範

神主・奈良県立大学客員教授
岡本彰夫

OKAMOTO AKIYO



おかもと・あきお
1954 (昭和 29) 年奈良県生まれ。國學院大學文学部神道科卒業後、春日大社に奉職、春日大社権宮司 (2015 年退職)。奈良県立大学客員教授、宇賀志屋文庫庫長。著書に『日本人よ、かくあれ』(ウェッジ) など多数。

「大和の水木か 水木の和か」と称された歴史学者、奈良女子高等師範学校・教授の十五堂こと水木要太郎翁は歴史や地理の研究のみならず、膨大な史料を蒐集した人であった。令孫菅夫翁は、公の施設がこれを収蔵してくれるよう奔走され、殆どが佐倉の国立歴史民俗博物館が購入、地元では柳沢文庫や奈良県立美術館等に分蔵されている。私も水木翁より連絡が入り、一部収蔵させて頂く光栄に浴した。

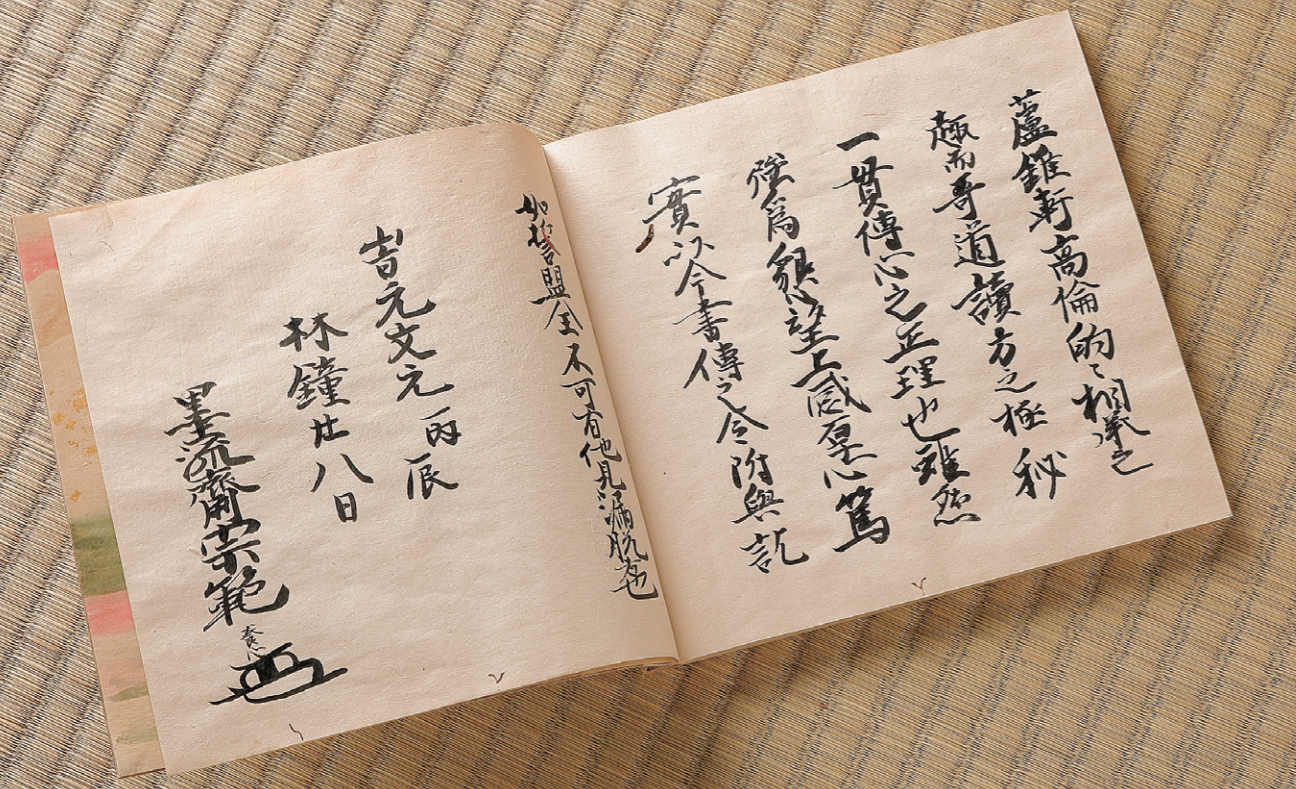
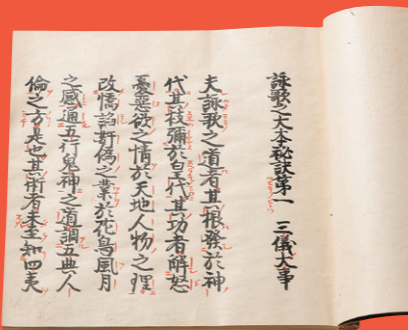
その中でも珍しい品と言え、現・田原本町大木の医師森本宗範で、古今伝授を受けた当時名のある歌人であった。その弟子で同町大網の歌人・藤門周齋の方が世には知られているが、管見の及ぶ限り『奈良縣磯城郡誌』でしか宗範の事歴は紹介されていない。その磯城

郡誌の指導監督は、水木十五堂であるから、歴史に埋没した宗範の史料は十五堂にとつても珍品に属したであろう。

昭和五年に十五堂が作成した、自らの蒐集品番付の三段目十枚目の東の「木白手紙二枚折」に対して西の「宗範貼交二枚折」が登場するし、昭和七年に大阪の道具屋連中が開催した「大和会 展覧目録」には東大寺や薬師寺を始め、京阪神を中心とした好事家百二十名が持ち寄った、大和ゆかりの品々が掲載されているが、その中で十五堂は「森本宗範扇面小風爐先」を出陳されている。かくも愛でられた史料であるからして、マクリで頂戴したものの、これでは申し訳ないと、表装して一軸に仕立て、二〇一〇年に出版した拙著

『大和古物拾遺』にも写真を掲げておいたところ、元・

石上神宮の神官で夙に精緻な文献史学者で知られた白井伊佐牟氏より連絡を頂いた。氏は森本宗範に興味を持たれ、既に「隠士森本宗範瑣事」なる論考を草して、皇學館論叢に発表されており、森本家や宗範の墳墓も調査されて、間違い無くその没年は寛保元年 (一七四一) で享年七十歳であると公表されていた。しかるに当方、十五堂伝来の扇面には「七十九翁 宗範」とある事から、この扇面は森本宗範に非ず、別人の宗範であるとの御示教であった。まさか彼の水木十五堂翁をもつてしても、かかる見誤りがあったのかと驚き入った次第だが、それ以来なんとしても宗範直筆をこの大和で守り伝えて行きたいとの念を厚くした。



『詠歌之大本秘訣第一 三儀大事』の表紙と奥付 いずれも宗範の直筆。

撮影：松井良浩

時に京都の古書肆にて宗範ゆかりの古今伝授関係の卷子が出たと聞いて入手したが、写本であつて直筆では無かつた。探して見つかる物でもなく、徒に十二年を過ごした昨年末、大阪の古書肆で発見。ついに大和の地で宗範史料を保管する事が叶った幸運に浴している。宗範事歴は磯城郡誌に次の如くである。

「大木村の医にして、墨流齋と号し、和歌を善くす。法隆寺(大綱)の藤門周齋は其門人なり、周齋曾て京都堂上家の歌匠に和歌の添削を請ふや、宗範の門人ならば我等の批評する必要なかるへしといへりとそ、以て其堪能なりしを知るへし。樺本柿本寺歌塚縁起、和陽皇都廟陵記の著あり。歌塚縁起は、大和国添上郡樺本郷治道山柿本寺歌塚の縁起由来を考徴記述したるものにて、享保八年癸卯三月十八日の作、和陽皇都廟陵記は、大和なる天皇陵の記なり。神武天皇より、九十六代後醍醐天皇に至る五十二帝の御事を記し、廟陵の所在、領主地頭の氏名を記せり。(中略 当国に廟陵なきものは、朱書して區別せり。本書文中、享保六年までの計算を示せる所数箇所あるによれば、同年頃の作なるへし。」